東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2008 年 3 月 28 日

批評・批判 -2-

親愛なるムスリムの皆様。本日も、先週に引き続いて批判・忠告と言うテーマを続けていきたいと思います。人の心理を考え、場合によっては批判・忠告する際に対象者の名前を明らかにしないこともスンナの一つです。さらに、クルアーンも多くの場合この方法を用いています。

預言者ムハンマドは、批判・忠告を行なう際には建設的な手段を用い、人々を遠ざけたり苦しめたりするような言葉ではなく、人々を引き寄せるような言葉を用いていたことは、クルアーンが証言しています。ウフドの戦いにおいて、何度も警告したのにもかかわらず弓矢部隊は預言者ムハンマドの言葉に従いませんでした。自分達の持ち場を離れ、結果としてウフドの戦いは大きな悲劇となったのです。

こういった形で自分の役割を放棄することは、ほとんど全ての軍の制度において重い罰を与えられる罪とされます。しかし預言者ムハンマドは、彼らにきつい言葉をかけることすらなさらなかったのです。

ムスリムの皆様。ののしり、からかい、軽視、個性への攻撃を、批判・忠告と混同してはいけません。批判・忠告が心からの誠実なものであればあるほど、言い換えるならアッラーのご満悦を求めるものであればあるほど、それは有意義なものとなるでしょう。クルアーンはあらゆる機会において、アッラーのほかに神とされる被造物に関しそれが過ちであることをのべています。しかしクルアーンは決してそれらをののしることはなく、またののしることを禁じてもいるのです。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。ムスリムはムスリムを、兄弟愛という基準の中で批判・忠告しあうことはイバーダであると見なすべきでしょう。大切なのは、その忠告が正しく、ふさわしいものであるかどうかなのです。ムスリム達は預言者ムハンマドが下された決定をも注意深く検討し、もしそれが啓示されたものでなく、預言者ムハンマドご自身の意見である場合は、それについて見解を述べていました。「アッラーの使徒よ、その方法ではなくこのような手段をとればよりよいのではないでしょうか。」と意見を述べていたのです。ウマルが、フダイビヤ条約についてとった振る舞いを思い起こしてみることも理解の役に立つでしょう。また、カリフに就任するや否や「もし私が誤ったことをしたなら、私をただしてほしい。」と言ったアブー・バクルのことも記憶にとどめておくべきでしょう。

ムスリムの皆様。批判・忠告を受ける側もまた、それらによって苦痛を感じないようにするべきです。自分に対して信頼できる人が批判を受けた時は、苦痛ではなく喜びを感じるべきです。批判・忠告には数え切れないほどのよいものが含まれます。しばしば、多くの誤解がこれによってただされます。そして新たな友情を築くきっかけにもなるのです。

ムスリムの皆様。批判・忠告は他人に対してのみ行なわれるものではありません。人は自分自身に対しても批判を行なうこと、つまり自己批判を行なうことが必要です。クルアーンはこの真実を次のように表現しています。「あなたがたは、人びとに善行を勧めながら、自分では（その実行を）忘れてしまったのか。」（雌牛章第４４節）

ウマルのものとされている、「今日、アッラーの為に何をしたか。」という問いは、ムスリムにとって非常に大切なものです。我欲をただして批判を受け入れ、また他者がただされるきっかけともなるムスリムは何と幸福なことでしょうか。